

「広島創生イノベーションスクール」プロジェクト

地方創生のプロジェクト学習を通して 課題発見・解決学習と異文化間協働を推進

広島県は、2014年、子どもたちの主体的な学びの充実に向け、「広島版『学びの変革』アクション・プラン」を打ち出した。そのリーディングプロジェクトとなるのが、「OECD日本イノベーション教育ネットワーク」の広島クラスターとしての活動だ。広島県教育委員会学びの変革推進課の寺田拓真課長から活動の狙いや進捗状況を聞くと共に、参加校の1つである広島県立呉三津田高校の実践を紹介する。

「たのしんどい」学びを通して 主体的な姿勢を生み出す

「広島版『学びの変革』アクション・プラン」策定には、2つの問題意識があります。1つは、県内高校生の学力の伸びが芳しくないことです。その改善には、学習の「量」を増やすのではなく、従来とは違うアプローチで「質」を変える必要性を強く感じています。もう1つは、教育の現状への危機感です。未来を背負う若者を育むのが教育であり、本来、社会の一步先を進んでいるべきですが、今は逆に一步遅れている状況です。先が見通せない時代を生きるために、

高校時代から答えがない課題に取り
組む経験を積むべきだと考えます。

広島版「学びの変革」アクション・プランでは、今、注目されている「アクティブ・ラーニング」という言葉をあえて用いています。主体的な学びは、アクティブ・ラーニングを「させる」ことが目的ではないからです。「学ばずにはいられない」「学びたくてたまらない」という状況の中で、生徒や教師が自ら学びをつくり上げていく学習を支援していきます。主体的な学びの柱は「課題発見・解決学習」と「異文化間協働活動」で、そのリーディングプロジェクトが、県内の高校1・2年生が「広島」をテーマにプロジェクト学習に取り組む「広島創生イノベーションスクール」(実施期間3年間)です。参加は全13校、59人です。各校3〜6人が1チームとなつて活動し、近隣の3、4校が集まる「エリアスクール」、全参加校が



広島県教育委員会事務局
教育部
学びの変革推進課課長
寺田拓真
てらだ・たくま

2004年、文部科学省入省。大臣官房、スポーツ・青少年局、生涯学習政策局政策課専門調査官などを経て、14年4月、広島県教育委員会教育改革推進課長に。15年4月から現職。

マにプロジェクト学習に取り組む「広島創生イノベーションスクール」(実施期間3年間)です。参加は全13校、59人です。各校3〜6人が1チームとなつて活動し、近隣の3、4校が集まる「エリアスクール」、全参加校が集まる「全体スクール」で情報共有や議論をしながら活動を行います。そこで目指すのは、「たのしんどい」学びです。学びは、楽しいだけでは遊びで終わってしまい、しんどいだけでは長続きしません。その両方が

ある時に、おのずと主体的な姿勢が生まれるのではないだろうか。

グローバル人材に欠かせない コンフリクトを乗り越える力

2015年度は、フィールドワークやインタビューを行い、課題調査と課題解決の方向性を検討しながら、「広島」に向き合いました。16年度以降は、解決策の実行に移ります。

また、生徒の視野を更に広げるため、ハワイで広島の魅力などを紹介する「グローバルスクール」や、海外パートナースクールの生徒を招いて協働活動を行う「グローバルスクール」も行う予定です。これらの活動を通して、地域と世界の共通点や相違点に気付き、OECDの「Education2030」でも議論されているようにコンフリクト（*1）を乗り越え、課題を解決する力の育成を目指します。更に「グローバルローカル」に加え、自分事として課題に関与する「インディビジュアル」（*2）も重視します。

当初は、生徒から「大人でも答えの出せないことを自分たちが考えられるわけがない」という声が聞かれ

ました。また、活動後の振り返りでは、大人が求めている答えを意識したような優等生的な内容が目立ちました。しかし、活動が進むにつれて、生徒の姿勢は変化してきました。

例えば、ある生徒は、アンケートに「わくわくしているけれども、同時に怖くなった」と書きました。「自分」が広島の未来にかかわっていると自覚したからこそ、怖いという感情が芽生えたのでしょう。別の生徒は、「先生に言われたことをやる方が楽だ。でも、やらなければいけないという気持ちになっている」と語りました。生徒が本気になり、「たのしんどい」学びが生まれつつあると感じます。

一方、課題もあります。例えば、生徒はコンフリクトを極度に避ける傾向が見られます。協働はコンフリクトを受け入れることから始まりま

学習の過程を記録させ、 「羅針盤」として活用

参加校間の交流には、「Classi」(*3)を活用しています。生徒は、Classiに学習過程を記録して情報を

共有したり、メッセージを送り合ったりして、コミュニケーションを深めています。今後は、自動翻訳機能も活用しながら、海外のパートナースクールとの交流も深める予定です。

従来の学びが、教師が運転する電車に生徒が一斉に乗り込んでゴールに向かう「電車型」だとしたら、我々が目指す学びは、生徒個々が自分で設定したゴールに向かって運転する「自動車型」です。それぞれ目的地や経路が異なる中で前に進むためには、現在地とそれまでの経路、目指す方向を常に確認し、他の生徒と情報を共有して協力することが欠かせません。そうした羅針盤としての役割が、Classiにはあります。加えて、生徒の思考過程が可視化されるため、教師も生徒一人ひとりに応じた働き掛けがしやすくなっています。

何より、これまでの活動を通して、生徒以上に教師の変化が大きいことに驚いています。指導法を工夫するうちに、教師自身も生徒と共に学ぶアクティブ・ラーナーになったのでしよう。今後は、より主体的な学びを追究し、得られた知見を各校での指導に還元していきたいと思

識者の視点

学びの過程の可視化が 多面的・総合的評価に結び付く



静岡大
大学院教育学研究科
准教授
益川弘如
ますかわ・ひろゆき

広島創生イノベーションスクールでは、Classiが有効に機能しています。各校内の情報共有や交流を出発点として、エリアスクールや全体スクール、更に海外とのつながりを生み出し、多層的なコミュニケーションを形成しています。他者の活動を見て、自分たちに足りないことを振り返り、テーマを設定し直すなど、リフレクション(*4)を支援する動きもあります。

更に、Classiは評価のあり方も大きく変えるでしょう。従来、知識はテスト、コンピテンシーはアンケートなど、それぞれ独立して測定していました。また、テスト実施時点で力を測るため、学びの過程は評価されませんでした。

そこで、どのような学びの過程を記録すれば、一人ひとりのコンピテンシーの成長過程を評価でき、生徒の成長を前向きに追っていくことが可能になります。つまり、これまでとは逆の発想の評価や授業が可能になり、多面的・総合的な評価へとつなげていくことも出来るかと考えています。

*1 conflict。(意見、利害などの)食い違い、不一致、対立。 *2 individual。(集団・社会に対しての)個人。
*3 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。 *4 reflection。熟考。熟慮。

ICTを活用して校内外で考えを深め合い 答えのない課題に粘り強く取り組む

多くの出会いを体験させて 内向きの発想を変えたい

広島県立呉三津田高校は、近年、グローバル人材の育成を目標に掲げて教育内容を見直してきた。しかし、そうした思いとは逆に、生徒が年々内向きになっているという課題意識が、広島創生イノベーションスクールに参加する動機となった。小路口真理美校長はこう述べる。

「生徒には、校内で目立ちたいという思いはあっても、校外で活躍することに消極的です。しかし、グローバルに活躍する力を育むためには、自分の中に多くの他者を取り込むことが必要です。なぜなら、『他者あつての自己』だからです。そのため、国内外での他者との多くの出会いが期待できる広島創生イノベーションスクールに参加することで、現状に風穴を開けたいと考えました」

参加メンバーには、予想以上に多くの生徒が手を挙げた。生徒の自主性や能動性を尊重し、あえて教師は口を出さず、生徒同士が「どれほど参加したいのか」「活動を通して何をしたいのか」などを話し合っ、参加メンバー6人を決めた。

教師はファシリテーターに徹し 生徒が気付く瞬間を待つ

プロジェクト学習のテーマは、「地域創生」だ。答えがないばかりか、何から取り組めばよいのかすら見当がつかない状態に、生徒は苦しんだ。同校で本事業を担当する教務主任の岡寄友一先生は次のように振り返る。「最初は、『このような活動をしたら、こういう答えが出るはず』と、まず着地点を見つけようとする思考からなかなか抜け出せませんでした。『答えが分かっていることに、3年間も掛けて取り組むのか』などと投げ

掛けをしていくうちに、答えが見えない状態からスタートすべき活動なのだと思いついたようでした」

当初、生徒たちの議論は、表面的なレベルで堂々巡りしてしまい、なかなか深まらない様子が見られた。しかし、岡寄先生は、歯がゆさを感じながらも考えるヒントを出すにとどめ、議論の内容にまでは踏み込まなかった。

「生徒の議論が深まらないのは、メタ認知の力が不十分なため、今までに何を話し、それを踏まえて、これから何を話し合うべきなのかを考えられないからだと感じました。教師が議論を引っ張つたら意味がありませんが、放っておくと何も進みません。私自身も答えを持っていないため、議論の方向性がおかしいなど感じた時には、『なぜ、そう思うのか』などと質問することで軌道修正させました。それを繰り返していくと、生徒がはつと気付く瞬間があります。その積み重ねにより、議論が徐々に深まってきました」(岡寄先生)

最初は地域の課題について、教室で延々と話し合っていた生徒たちが、「外に出なければ何も分からない」と



広島県立呉三津田高校
岡寄友一
おかさき・ともかず
教職歴20年。同校に赴任して10年目。教務主任。



広島県立呉三津田高校
校長
小路口真理美
しょうじくち・まりみ
教職歴34年。同校に赴任して1年目。

気付いた瞬間があった。それ以降は積極的に外に出るようになり、「地域の中で大切にしたい人を探す」というミッションでは、自分たちで市役所に相談に行き、職員に紹介された人に話を聞きに行くことを決めた。訪問を依頼した後に、その人が学校から非常に遠い所に住んでいることが分かり、話を聞くまでに手間が掛かったが、「それもまた貴重な経験」(岡寄先生)と受け止めている。

Classiに考えや気付きを記録し、メンバーの思考を可視化

チーム内の連絡や情報交換、考えや気付きの共有には、Classiを活用している。タブレット端末は学校外に持ち出せないが、スマートフォンからでもログイン出来るため、家でも



メンバー6人は、タブレット端末をほぼ毎日活用。他のメンバーとも共有するため、しっかり考えて記録するようになったという。

閲覧や書き込みが可能だ。

メンバーは毎週のリフレクションをClassiに記録。各自の振り返りを共有して翌週の活動に生かす。更に、自身の思考過程を振り返ることで気付くことも多いという。2年生の中野萌さんは、「過去の活動内容だけではなく、その時に何を感じたのか、どのような反省をしたのかも記録されているため、プレゼンテーションの資料作成などに役立ちます」と語る。

他校との交流を通して思考の広がりも見られる。2年生の内野弘毅さんは、「他校の活動内容もリアルタイムに共有できるの

で、自分たちの計画を客観的に見直したり、迷った時の参考にしたりしています」と話す。

教師にとっては、生徒の思考過程を把握しやすいことが大きな利点だと、岡寄先生は語る。

「生徒の書き込みを時間軸で見ると、成長過程がよく分かります。プロジェクトの進捗状況にも目が行き届きますし、行動も把握できるため、安全管理にも役立っています」

イノベーションスクールの知見が他の教育活動に波及

本事業の実践は、同校の他の教育活動にも影響を与えている。岡寄先生は、担当する英語の授業のあり方を見直し、思考力の育成を狙いとして、答えがない課題を取り入れるようにした。例えば、ノーベル平和賞受賞者のマザー・テレサについて、批判的な内容の英文も読ませた。そして、「批判があっても偉大だと思えるか」という観点でグループ討論をさせ、全体発表をした後、個人で英文にまとめるという活動を行った。

今後は、イノベーションスクール

を通して得られた指導方法などを「総合的な学習の時間」での探究活動などにも応用したいと考えている。

また、同校は、15年12月にアメリカ・カリフォルニア州の高校と新たに姉妹校の提携を結んだ。今後、姉妹校とのプロジェクト学習を展開する計画だと、小路口校長は話す。

「交流活動にとどまらず、コンフリクトを乗り越えるようなプロジェクト学習を行いたいと考えています。本気になれるきっかけを与えれば、生徒は内向きから外向きに変わるという手応えをイノベーションスクールの活動を通して得られたので、姉妹校提携の話が持ち上がった際には、前向きに考えられました」

イノベーションスクール参加に端を発する学校改革は、大学入試改革も意識していると、小路口校長は語る。

「教師が答えへと導くのではなく、様々な他者と出会わせることで、考えを深めたり、認識を改めたりする学びを校内にもっと広げていきます。それにより、グローバル人材として必要な資質が身に付くと共に、生徒が自信を持って語れる活動歴や学修歴につながると考えています」

メンバー6人の声

◎自分が何も分かっていないことが分かりました。まだ答えは出ていませんが、地域創生を出発点として生きる意味を考えています。
(2年生 内野弘毅さん)

◎私には、何事にも安全策を考えて行動する傾向がありました。が、何度も失敗する中で、「失敗は成功のもと」という言葉の意味がよく分かりました。
(2年生 中野萌さん)

◎頭で考えるだけではなく、行動して考えることの大切さを実感しました。もともと堂々と発言し、メンバーと充実した議論が出来るようになりたいです。
(2年生 坂本理季さん)

◎仲が良い人たちだけで集まるのではなく、出来るだけ多くの人に話しかけ、多様な意見を取り入れたいと考えてるようになりました。
(2年生 茅本久生さん)

◎常に時間を意識して行動する大切さを知りました。この活動以外でも、「いつまでに何をやるか」を意識するようになりました。(1年生 谷凌介さん)

◎考えが頭にあっても、意見として整理して、他者に伝える難しさに気付きました。きちんと筋道を立てて説明できるようにするのが目標です。
(1年生 中畑希さん)